

生き方と死に方ー母の「闘い」 つづき

何度も何度も肺炎などで入退院を繰り返しながらではありましたが、父は母とともに暮らしを続けました。

そんな母が力つきたのが2016年の6月。最期の入院は「何かいつもと違う」と感じ訪問診療の医師の紹介で済生会への入院でした。

入院直後に発熱。案の定、誤嚥性肺炎です。母はその頃すでに口からの食事は不可能となり、胃ろうを造設していました。それでも誤嚥は防げないのです。担当の先生は直ぐに肺炎の治療を始めます。ところが今回は今までと事情が違いました。抗生剤に身体が反応しないのです。医師と面談をしても思わしい展望は見いだせません。

そこでわたしたち家族は母を自宅に戻すと決めたのです。

酸素を10リットルも流す中で連れて帰ることに、帰省をしていた兄は「こんな状態で大丈夫か？」と動揺を隠しません。

しかし、父の気持ちは固まっています。わたしも「こんな状態だから退院させるんだ」と。

病棟の看護師はわたしと長くともに仕事をしてきた信頼できる仲間です。週明けに連れて帰ろうと考えていたわたしに「連れて帰るなら今が一番落ち着いているから今日にしては」と助言を受け、金曜日夕方まさに「緊急退院」です。

訪問診療医も直ぐに訪問を再開を約束。濃縮酸素器も直ぐに設置。病棟の看護師さん二人が自宅まで同行しての退院となりました。そして母はいつものベッドに身体を預けました。

変化がそこで起きたのです。母の目に光が戻ったのです。その姿を見た兄もその時点では退院させたことに確信を持ったようでした。そして、そこから3日後、母は世を去ったのです。

いのちは誰にも等しく有限です。
だからこそ家族や、本人が望む場所での生と死でなければならない
と思うのです。

父と母の療養の歴史はこちらに
詳しく記録されています。



本の紹介



新版 ひめゆりの少女 十六歳の戦場

著者 宮城 喜久子 著
普天間 朝佳 監
ジャンル 沖縄関連書 > 沖縄戦
出版年月日 2025/05/09
ISBN 9784874989135
判型・ページ数 4-6・208 ページ
定価 本体 1,700 円 + 税

出版社 高文研

先に京都の政治家の方が沖縄ひめゆり部隊の歴史を語り、その歴史認識が問題とされました。

太平洋戦争が終わり戦後 80 年を迎える今日、歴史は風化しつつあります。そしてその被害の語り部も数少なくなりました。

福祉や介護は個々の人の国籍や門地に関わらず等しく人権を守る仕事です。戦争は最たる人権侵害です。

だからこそ多くの介護従事者や福祉関係者にこの本をおすすめします。

血で赤く変色した泥水をすすって生きのびた人々がいたことを忘れるようになれば、私たちの住む日本が再び悲惨な体験を繰り返すかもしれません。

有限会社 おとくに福祉研究所

きょうと福祉倶楽部

〒617-0824

長岡京市天神 4 丁目 7-12 ハイツ東台 101 号

TEL 075-958-2560

FAX 075-957-2808

E-mail info@fukushi-club.com

きょうと福祉倶楽部ホームページ

